

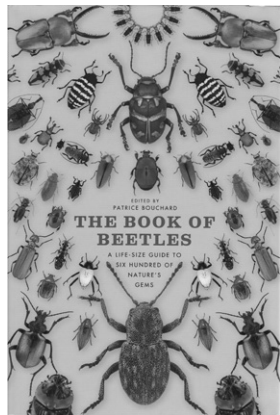


パトリス・ブシャー総編集
丸山宗利 日本語版監修
世界甲虫大図鑑 The Book of Beetles
655 pp. 東京書籍 6,500円 (税別)

本書は Bouchard (2014: *The Book of Beetles: A Life-size Guide to Six Hundred of Nature's Gems*. 656 pp., Univ of Chicago Pr.) の日本語訳本である。原本をたいへん忠実に訳しておりその情報はとても貴重である。加えて原本も決して難しい英語で書かれたものではないけれど、日本語でこれが読めるメリットは計り知れない。それにこのクオリティでこの価格は安い！素晴らしい。これは絶対に買いの1冊である。カバーが英語版(左)と日本語版(右)で違っているのも何とも洒落である。

甲虫目のほとんど全ての主要科を1ページ程度で短い解説と代表的な種の大きな写真と共に掲載している。よくぞこんな甲虫の写真が撮影できたな、というような標本も掲載されている。たとえばアケボノムシ *Sikhotealinia zhiltzovae* Lafer, 1996 やカオナガムシ *Podabrocephalus sinuaticollis* Pic, 1913, クローソムシ *Crowsoniella relictata* Pace, 1975 などは、世界中でも1~数個体の標本が知られるだけの種で、それをこんな大きな写真で見ることができるだけで眼福である。

訳本ではその体裁を変えずに完全日本語訳を行っている。1つ気になったのは和名だ。各科に対し和名を与えており利便性は計り知れないが、Crowsoniellidae にクローソムシ科, Jacobsoniidae にヤコブソムシ科という苦肉の策ともいえる名前も散見される。中に



は *Epimetopus* 属にギザムネガムシという名前を付けているように秀逸なものもある。実際にマイナー科の名前を考えるのは大変だっただろう。和名は定着したものが標準になると私は考えているので、今回の名前が定着するかどうかは今後委ねられていると思う。目くじらを立てる必要はないのだ。しかし、そうは思わない人も居るだろう、そういう人たちにまた喧嘩を売らなくても良いのに、と私は少し心配した。

上野俊一 (2006: NUE (17): 1-3) は、自身の研究生活を振り返り“セレンディピティー”に助けられたと綴っている。日本人が日本で日本の材料を元に生物分類学の研究を行う困難さは、島国であるだけでなく、タイプ標本の問題、古い文献を入手する難しさ、就職先の問題等、そして最も大きなものとして語学の問題があり、日本に生まれてきたことだけでも研究遂行上の大きな障害であると私は痛感させられてきた。なので“セレンディピティー”などという言葉で片付けられないだろうと、その文章を読んだ時に思った。上野先生だからそう思えるのであって、実力の無い自分には絶対にそうは思えない、という嫉妬にも似た気持ちが残ったことを覚えている。

今回この本を手にして原本と並べながら眺めているうちに、もしかすると日本に生まれたこと自体は、実は生物の分類学を行う上で最初の“セレンディピティー”だったのかも知れないと思える

ようになってきた。本書が母国語の日本語で読めるありがたさをじっくり味わいつつ、本書を日本語訳世に出してくださった丸山さんに感謝したい。

(愛媛大学ミュージアム 吉富博之)